

イスラーム・ジェンダー学科研 2021 年度

イベント名：巣ごもり読書会『言葉はいかに人を欺くか—嘘、ミスリード、犬笛を読み解く』

日 時：2021 年 11 月 28 日（日）13:30～15:00

会 場：Zoom を利用したオンライン開催

語り手：小野 純一（自治医科大学）、山川 仁（自治医科大学）、沼田 彩誉子（東洋大学）

司 会：小野 仁美（東京大学）

* * * * *

司会：この巣ごもり研究会は、おなじみの方も多いと思いますが、科研費基盤研究（A）イスラーム・ジェンダー学と現代的課題に関する応用的・実践的研究の主催で行います。

本日の課題図書はジェニファー・ソール氏の『言葉はいかに人を欺くか—嘘、ミスリード、犬笛を読み解く』です。今日のスケジュールはここにお示しした通りで、3 名のご登壇者の皆様方に、20 分ずつお話をいただくことにしています。その後で、質疑応答の時間を設けておりますが、発表の間でも質問はチャットでいつでもお受けいたしますので、どんどん議論に参加いただければと思います。申し遅れました。私、今日の司会をいたします、小野仁美と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日の課題図書の著者であるジェニファー・ソール氏については、それぞれのご登壇者の方からご紹介があると思いますので、割愛いたします。それでは、今日のご登壇者を簡単にご紹介させていただきます。最初のご報告者は、小野純一さんです。小野純一さんはこの本の翻訳者でいらっしゃいます。現在は自治医科大学にご所属で、ご専門はイスラームの思想を含む哲学思想史ということで実は、私の後輩にあたります。イスラーム学研究室の後輩とは言っても、非常に幅広い範囲の色々なことをよくご存知で、私は常に色々なことを教えていただく立場でいます。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

そして二番目のご登壇者の山川仁さんのご専門は近世イギリス哲学ということですが、この課題書籍の校閲をなさったということで、今日は翻訳者と校閲者という作り手の側のお 2 人にまずお話をいただけるということになっています。

三番目のご登壇者は読み手の代表としてお招きいたしました、沼田彩誉子さんです。私が沼田さんにぜひご報告をお願いしたいと思った理由が、今日のテーマとも関わるのですが、最近までアメリカで調査研究をされていました。2 年間ぐらいという風に伺っていますけれども、現地でのお話、そしてそれを今日、この本を通じて日本での議論にどう広げていけるかというところまで、考察していただけるという風に伺っています、大変楽しみです。どうぞよろしくお願いいたします。それでは早速、第一登壇者の小野純一さんよりお話をいただきたいと思います。

小野：よろしくお願いいたします。今回は貴重な機会をいただきどうもありがとうございます。小野仁美さんにはいつもお世話になっておりまして、またこういう機会をいただいて、大変感謝しております。それから山川さん、沼田さんもこのような機会に参加していただけるということで、どうもありがとうございます。山川さんは私以上に丁寧に本を読んでくださったと思いますので、心強い限りです。それから沼田さんもソールが扱っているような政治問題に大変お詳しいということで、ご発表を楽しみにしております。今日お話ししたいと思います順番としては、まず著者の最近の活動も含めて紹介をすること、それから「嘘とミスリ

ード」という、本の主な部分で扱われている議論をごくごく簡単に紹介することといたします。そして最後に犬笛が本の方では付録として入っておりますが、これとそれからほぼ同時にソール自身が研究を行っていた「人種のイチジクの葉」という問題を扱いたいと思います。それを合わせて扱う理由というのは、著者の紹介のときに判明するかと思います。

この本を紹介、翻訳しようと思った理由ですけれども、そもそも私の関心にあったのは、神秘主義体験を記述する思想家たちの哲学的な考察です。イスラーム思想ではとりわけ神秘家たちが活発にいろいろな著述活動を行っていて、ギリシャ哲学由来の概念を用いたり、独自の概念を創り出したり、それから神学的なアプローチをとったり、文学的な詩的な表現に訴えたりしています。でも我々がそのような体験を共有してない場合、何を言っているか判然としません。というわけで、言葉の意味を考えるということは常々自分のテーマでした。言語学や言語哲学などを勉強し、海外で専門的に勉強し、その繋がりですールの活動にはずっと関心を持っていました。嘘やミスリードを扱うというのが非常に斬新だと思ったことが、ぜひこれを紹介したいというのが理由の一つです。それから理論的な考察が実は社会問題、特に私たちの日常生活に決定的に影響を及ぼすような政治問題、あるいはそれ以外の日常レベルでの差別などにも光を当てる分析であるという点で非常に関心を持っておりました。それが翻訳しようと思った理由です。

では、まずソールの紹介に参ります。パワポの方ですけれども、ソールの写真を3つ並べております。向かって左側に見える雑誌を掲げているのは、哲学者をインタビューする有名なサイトからもらってきた写真で、その反対側に S. Soames と書いてある方、これも同じ哲学者を紹介するインタビューのサイトからもらってきたものなのですが、この2人は師弟関係にあります。次のスライドにいきますと、リンクがありますので、ご関心のある方はご覧ください。ソールは、プリンストン大学でソームズという教授、分析哲学・言語哲学を専門とする人のところで論文を書きました。写真を見て、これはバイアスかもしれませんが、ソールの方は髪の毛を紫にしていたり、ちょっとおちゃめな写真の撮り方をしたりなどしています。これに対して、ソームズの方はずいぶん保守的なスタイルの写真を撮っているように見えます。実際、ソームズ自身も自分は保守的だと言っていて、トランプ支持者です。面白いことにジェニファー・ソールはクリントンの分析をした後、今度は最近の論文でトランプの発言の分析し、いわば哲学的批判を加えています。このように彼女の最近の研究では、トランプの発言が犬笛分析の対象となったり、あるいは「人種のイチジクの葉」という新しい概念を構築するために分析対象となったりしていて、師弟関係にありながらも立場が全く異なるという面白い関係に両者はあると思い取り上げました。

著作を紹介する形で彼女の活動を少々紹介いたしますと、ソールはシェフィールド大学で24年間教鞭をとっていたのですが、2019年にカナダのウォータールー大学に移り、今は言語の社会的・政治的哲学という講座の主任を務めています。シェフィールド大学にいた間に、いくつか大きなプロジェクトを行っていて、非常に著名なものとしては、インプリシットバイアス (Implicit Bias) というプロジェクトのディレクターをつとめました。これは2011年から13年にかけて行われたもので、2冊の本として出版されております。この分野でこれほど大規模な実証的な研究は哲学においても、心理学においても初めてとされているものです。それから彼女個人の著作として一番新しいものは、私が翻訳いたしました *Lying, Misleading, and What is Said* という本で、和訳の方ではこれに、犬笛に関するより新しい論文を付録として入れています。その前に出した本としては、より言語哲学プロパーの著作があり、そしてその前にはフェミニズムに関する著作も出版しております。本の表紙をパワポの方に上げておきましたが、この『フェミニズム』という

著作は教科書として書かれたもので、彼女個人の立場を明確に打ち出しているものではなく、関連する主要な問題を扱っております。

こういうことから彼女は様々な分野に通じ、様々なことを研究対象にしているということが分かるかと思います。実際に最近、イギリス政府のプロジェクト、米国政府のセキュリティ人材の多様性を高める支援などに携わっております。そこでは、統計の誤解を招くような使い方を理解し、分類するためのフレームワークの開発などを行っているようです。またシェフィールド大学の哲学と心理学の同僚たちと共同研究として独自の実証研究も行っており、それによって多様な労働力の採用と維持を改善する方法について助言などもしているとのことでした。

現在、彼女が準備中の著作があります。それは『心の声をハッキリ漏らす／心の声がよく聞こえる (*Saying The Quiet Part Loud: How Dogwhistles and Figleaves Facilitate Blatant Racism and Falsehood*)』という仮のタイトルがついております。これは、あからさまな人種差別、虚言、嘘、真実を述べないようなことを助長するような言語行為としての犬笛、それから後ほど扱いますイチジクの葉の仕組みについて論じる予定のものだということです。これによってこの本は、政治家がこれまで考えられていたよりも遥かに明らかに、虚偽や人種差別を逃れることができるメカニズムを開発していて、そういったもので政治活動を行っているということを分析できることが示されると思われます。これについてはウォータールー大学の方のホームページに書いてありましたので、そこから情報をとってまいりました。

では、まずこの後の発表の概要を提示いたします。テーマとしては、「嘘とミスリード」ですが、これをなぜ言語哲学のテーマとして扱えるのか、また扱うとどのような利点があるのかといったことを説明して、それがいかに倫理的な問題に繋がるかをお話したいと思います。通常、言語哲学では「言われていること」というのは、指示対象であり真偽判定の対象、嘘か本当かが判別できるようなものだという前提で、伝達行為・伝達言語の側面から言葉の意味というものにアプローチしていると思われます。ところが、よく知られている言語行為としての嘘やミスリードといったものは、文字通りの意味を伝えるものではないことを皆さんもご存知かと思います。ということは、言われていることが本当か嘘かがはっきりするようなものではないものを扱うことで、「言われていること」、あるいは「意味されていること」とは何かに関するこれまでにないアプローチが可能になり、別の角度から言語哲学の重要な問題に迫れるはずです。そういう形でソールはこの本の中で嘘とミスリードを扱うと思います。

では、まず第一章で主に取り扱われていることに参りたいと思います。まずパワポの方で最初に少し小さな字で挙げてありますのは、ソールによる「嘘をつくこと」の最終的な定義です。パワポの方では、下線を引いてあるところに着目していただければと思います。本の方では、下線は引いてありません。線を引いた部分は、Pつまり述部当たる部分です。話し手は発言内容Pを述べ、話し手自身はそのPが嘘、間違い、真実に反するということを自覚しています。そして自分以外にはその間違いを指摘できる人がいないというのを示すのが(3)です。ここで取り組むべき問題は「言われていることは何か」だということが分かります。ソール自身も本の37ページで述べているように、完全な嘘の定義を求めているわけではなくて、「言われていること」を明らかにする目的で、嘘というものを見ていきたい、そのためにまずは嘘を定義しておく、というのが、第一章の主旨です。ですので、第一章は、非常に緻密に嘘の定義、嘘の分析を用いて嘘を定義していく過程を見ることができます。これはまさに典型的な分析哲学の手法で、模範的な手法ではないかと思います。

続いて「言われていることは何か」という問題に移ります。嘘の定義自体に関しましては、山川先生の方からより詳しい説明があるかと思いますので、私の方では、まずソールの定義から出発して、通常考えられている「言われていること」との違いの方に着目してみたいと思います。ソールの出発点は、グライスというイギリスの言語哲学者です。グライスは「言われていること」と、それ以外の方法で「伝えられていること」を明確に区別した最初の哲学者と言われます。これに関しては本の48ページあたりに言及があります。グライスは「言われていること」は字義的な意味、規約的な意味と密接な関係を持つはずだと考えていました。そうすると、嘘やミスリードとの関連ではどうなるのでしょうか。あるいは、字義的には全く言われていないにもかかわらず、聞き手が受け取る意味、「言われていること」だと聞き手が認識するものとは、どういう関係なのかという疑問がわきます。実際にグライスはこの問題を詳細に議論することがなかったで、それ以降の哲学者たちが詳細に議論していくことになります。その中でソールが取り上げるのは、まず「非制約的な概念」、それから「制約的な概念」、そして「厳密な概念」です。彼女はこれらを一つ一つ細かく丁寧に確認していきます。これが第二章です。

「非制約的な概念」とはどんなものか、簡単にお話しておきます。発話された文からかなり離れたことが言われている場合があると思います。ただ、かなり離れているとは言っても、それでも聞き手は「言われていること」を理解することができて、しかも嘘には当たらないような場合があります。ソールはまずこのような、ミスリードや嘘を定義するにはあまり寄与できない概念について議論します。

それから次の「制約的な概念」ですが、これは「非制約的な概念」とは違い、文脈が言われていることを補ってくれるものです。これによると、聞き手の側は話し手の「言っていること」、「言われていること」を理解できるには、話し手と聞き手の両方の条件が必要になります。そこでソールは例えば59ページとか62ページあたりで話し手の条件、それから聞き手の条件というものを考察して、これによって、事実を述べながらも、ミスリードすることが可能な場合を証明します。そうすると、文脈によっては文脈が「言われていること」を補う状況、および文脈によっては事実を述べているにもかかわらず、ミスリードすることができるという状況があるとわかります。このようにソールは「言われていること」を観察し、この概念は嘘とミスリードを区別する目的に適さないと判断します。

つまり、嘘やミスリードでは「言われていること」と発話された文章とがだいぶ違うので、「非制約的な概念」によって嘘やミスリードを厳密に理解できそうにありません。「制約的な概念」によっても同じく対応しきれないような状況が出てきます。

というわけで、次にこのような緩い「言われていること」の理解ではなくて、もっと「厳格な概念」で理解したらどうかという議論がなされます。そこで今度は、グライスが完全には扱うことのなかった指示語の分析などが行われます。それから「統語的な省略」という現象も扱います。「統語的な省略」には、場合によって文脈が補う場合と、文脈が補わない場合があります、例えばそれがクリントンの事例として出てきます。クリントンの例は、79ページから80ページに出てくるのですが、これは繰り返し用いられる「不適切な関係はありません」という文章です。これは文章としては、何ら不足のない文章ですけれども、実際にこれを聞いただけでは、具体的に「何が言われているのか」、「言われていること」が分かりません。統語的な補い方をするのであれば、「私とルウィンスキーさんとの間には不適切な関係はありません」という形で、補うことが可能になるかと思います。ソールはこれを統語的な省略の典型例として取り上げるわけですが、実はこの統語的な省略を補うことにも限界があることを81ページ以降さらに分析していきます。

ごくごく簡単に第二章をまとめます。「非制約的な概念」では嘘やミスリードの区別ができない。「制約的な概念」を用いても、場合によってはミスリードを嘘と見なしてしまう事例や、真実を言っているのにそれを偶発的な誤りと見なしてしまう事例に対応できない。「言われていること」に関する「厳格な概念」では、嘘を嘘と見なさないことにさえなりかねないし、先ほどのクリントンの例では、彼は真実を言いながらミスリードをしようとしているのに、彼を明らかに嘘を述べる人と見なすことになってしまう。こういったことが第二章で述べられます。

次は第三章の説明をします。第三章では、嘘やミスリードの区別に「言われていること」の真偽判定が必要であることが述べられます。112 ページから 113 ページでは「言われていること」の真偽、嘘とミスリードを分けるための定義づけがなされます。最終的な定義としては、109 ページに述べてある通りです。「言われていること」は発話された文と密接に関係しています。これは必要な条件の一つですが、多義的な言葉を含んでいる場合、文脈によって異なることも設けています。それから最後に扱った真偽判定に関して、「言われていること」が真理値を決定する点を述べ、これによって嘘やミスリードの違いが区別できることを具体的に示します。その際に、言葉の意味そのものと「言われていること」を分けるのがソールの立場です。なぜなら、ソールの目的は、あくまで会話の分析だからです。

第四章ではこれまでの分析成果を倫理的問題に応用し、概念的な考察の成果が実生活の問題の解明に資することが示されます。それとともに、これまで無批判に、嘘がミスリードより悪とされていた事実、再考を促します。ミスリードが虚偽発言と同様あるいはそれ以上に社会的悪影響をもたらす点でどのように悪であるかを言語哲学的に提示するのが第四章と言えるでしょう。これを踏まえ、第五章は嘘とミスリードの区別を念頭に、通常嘘の方が悪いとされる例を古代から現在まで検討し直します。第五章も様々な例が読み物として楽しい形で読めるようになっていると思います。

まとめましょう。ミスリードと嘘はどう違うのでしょうか。嘘は成功しなくても真実に反することなので、嘘として成立していますが、ミスリードは聞き手が「言われていること」を信じない限り成功しません。その点で大きく異なるということをソールは述べています。それから、嘘はミスリードと異なって、常に意図的です。定義によれば、騙す意図がないものを嘘とは見なさないため、意図せずに嘘をつくというのは不可能ですが、ミスリードは意図しなくてもできます。全くの偶然、意図しない形でのミスリードも可能でしょう。ここに倫理的問題への転換点があると思います。というのは、嘘のような意図的な悪事は悪は偶然のミスリードとして悪より悪質となるでしょう。そう考えると、意図的なミスリードと嘘を対比する必要があります。必ずしも嘘の方がミスリードよりも悪いとは言えないという状況が出てくる。それが犬笛などで扱われる人心操作・政治操作としてのミスリードということになってくるかと思います。それによって言語分析でありながら、倫理的問題へと繋がるすることができます。ここに言語分析が持つ実践的、社会的重要性と倫理学的意義、およびソールの意義を見ることができます。少々時間がオーバーしてしまいましたので、犬笛の方は沼田さんの方にお譲りすることにして、私はこれで終わりにしたいと思います。ありがとうございます。

司会：ありがとうございました。

まだまだ聞きたいところではあるのですが、先ほど予告のあったイチジクの葉については、後ほど質疑応答のときに補足の説明としてお願いしたいと思います。ということで、続きまして、山川さんの方からご報告をお願いしたいと思います。

小野純一さんどうもありがとうございました。山川さんどうぞよろしくお願いいたします。

山川：よろしくお願いいたします。ご紹介にあずかりました山川です。

『「嘘、ミスリード、犬笛」とブラックジョークの比較検討』というタイトルでお話させていただきたいと思います。今回の話題提供の流れというのは、今スライドで示している形でさせていただければと思います。

私自身については、最初にご紹介いただいた通りで、西洋哲学の研究をしているのですが、言語哲学の専門家ではなくて、語用論を中心にした言語哲学の議論の細部に通じているわけではないのですが、今回は、非専門家の立場から今回の課題本について話題提供できればということで、お話させていただければと思います。今回の課題本は、嘘、ミスリード、政治的な犬笛といった発話を主なテーマにしているかと思うのですが、ここで私はブラックジョークというのを取り上げて、ブラックジョークとの対比で嘘、ミスリード、犬笛について何か考えられることはないかということで、お話をさせていただきたいと思います。

先ほど小野純一さんからもソールによる嘘の定義というのが出てきたと思いますが、ソールは、同書で嘘をつくことの定義で、言語的な思い違いとか、言い間違いとか、あるいはメタファー、誇張・皮肉ではないような場合で、ある話し手があることを言って、そのあることは誤りだと信じていて、何らかの保証を与えるような文脈に自分がいると見なしているような場合に限り、その話し手は嘘をついているというような定義を与えております。このようにですね、何らかの保証を与えるような文脈にいる場合ではない、例えばジョークを言うような場合は、ソールによる嘘の定義から最初から除外されているということです。

先ほど小野純一さんからもお話がありましたように、ソールは先ほどの嘘をつくことの定義を練り上げる際に色々な検討をしております、自分がジョークを言う場合というのをその定義から外すという作業を行っています。確かに同書ではジョークの中には明らかな嘘があるという例が挙げられています。ここでは検討しませんが、明らかな嘘を言う場合というのがジョークの中にはあるので、そのような場合が嘘の定義から除外されているということですね。このように嘘をつくこととジョークを言うことの間には、重なり合う部分があるということが分かるかと思います。

ここで具体的なブラックジョークを例にして、嘘・ミスリードと比較することによって何らかのことが見えてこないかということをやろうかと思います。私がよく SNS などで見かけるブラックジョークの例として、例えばある有名人が亡くなるという出来事があって、ニュースとして広がったとします。その時に、その人物と似た属性を持つ別の現存する人物というのを追悼するコメントというようなものが、SNS に上げられるようなことがあるかと思います。例えば非常に社会的に地位が高いとされているような高齢男性の有名人 A が死亡したとして、別の存命の高齢男性で、社会的地位が高いとされているような人 B への追悼コメントをするというようなブラックジョークをたまに見かけることがありますが、そのようなコメントをする人物というのはボケとして、そのようなコメントをしているのですが、中にはそれを事実だと勘違いして、マジレスというのですかね、「いや、亡くなったのは A さんで、B さんではありませんよ。」というレスポンス・コメントがなされるというようなこともあるかと思います。

こういったブラックジョークに対して、大抵の人は、それは A のことだろうというようなツッコミを入れて理解するかと思いますが、中には信じてしまう人もいるだろうし、一瞬嘘なのかな、いや本当なのかなと思って、ああなるほど、そういうことなのね、という気づきをあとで得るいう場合もあるかと思います。

こういったブラックジョークの例を考えると、先ほど言いましたように、先ほどのようなブラックジョークの内容を本当のことだと誤解する人もいますし、それをジョークだとみなす人がいたとしても、一瞬それを本当のことだと理解するという瞬間があるということが言えるかと思います。こういった今検討したようなブラックジョークというのを考えると、それは先ほどのソールの嘘の定義から除外されるものだと思うのですが、やはり結果的にこのように一定数信じる人もいるので、それは嘘に近い発話だと考えることができるのではないかと思います。つまり聞き手のリテラシーによって、一種のフェイクニュース、誤情報の拡散に繋がるようなものとして、ブラックジョークというのはいりうるのではないかということが言えるかと思います。

今検討したようなブラックジョークは、ミスリードとも考えられるのではないかという風に思われるかもしれませんが、基本的にミスリードというのは本当のことを言って、聞き手の誤解を意図するようなものと言えるので、今言ったようなブラックジョークというのは、ミスリードよりも嘘に近い発話なのではないかと言えるかと思います。

ソール自身は、先ほど小野純一さんのお話にもありましたけれども、課題本の中の嘘の定義というのは、改良の余地があって、現状では今言ったジョークのようなものも含めて、一般的に嘘とされるものも含む形で新しい嘘の定義が今後追求されるべきじゃないかという話をしているのですが、例えば今、パンデミックの状況で最初はジョークのようなつもりでトイレトペーパーがなくなるとか、マスクが買えなくなるとか、そういった軽はずみに言ったかもしれない情報がフェイクニュースとして広がって、実際物資が買えなくなったとかそういう状況がある、こういった時代において、私の考えとしては、ソールによる嘘の定義というのは、改変の時代にあるのではないかということが一つ言えるかと思います。

次に、政治的な犬笛とブラックジョークというのを比較させて、何か考えることができないかということでお話しできればと思うのですが、犬笛の種類として、3つぐらい、ソールは挙げているかと思いますが。あからさまで意図的な犬笛というのが、一部の予備知識を持つ人に対してはメッセージが届くけれども、それ以外の人にはメッセージが届かないというような種類の犬笛ということ言われています。

例えば、この本の中で例として挙げられているのが「バックスバニー」という子供向けアニメで、それは明らかに子供には分からないような大人向けのテーマが込められているというようなものです。これは政治以外にも広く適用されるようなものじゃないかということが言われています。日本でも 90 年代初頭に「ウゴウゴルーガ」という子供向け番組があったと思いますが、そういったものをイメージしていただければと思います。

次に隠れた意図的な犬笛ということで、この本の中で例として挙げられているのが、これが犬笛の中心的なものとしてこの本では紹介されているかと思いますが、1988 年のブッシュ対デュカキス選で利用されたとも言われているものです。それは犬笛とされるメッセージが、直接的に政治的な争点となるメッセージではないのですが、発するメッセージから、無意識的に何か連想させるような、犬笛メッセージというのがあって、例えば人種差別に繋がるような内容のメッセージが犬笛として使われているというような手法があるということです。これは犬笛の発信者が上手く責任逃れできるような内容が犬笛メッセージとして盛り込まれているというようなものが 1 つ種類としてあって、もう 1 つは、意図的でない犬笛と言われるもので、その特徴は犬笛の拡散です。そのメッセージが犬笛だということを理解せずに、二次的に犬笛メッ

セージを聞き手側が再拡散させるというのが、意図的でない犬笛ということで説明されているかと思いません。

今回、政治的な犬笛とブラックジョークとしての犬笛というのを比較して何か考えることができないかということでお話をしましたが、先ほど述べた犬笛の種類の中で、あからさまで意図的な犬笛というのが、ブラックジョーク的な犬笛との比較として検討できるものではないかということを取り上げたいと思います。このあからさまで意図的な犬笛というのは、この課題本の中で紹介されている例としては、2003年にジョージ・ブッシュが、「奇跡を起こす力がアメリカの人々の善良さと理想主義と信念のうちにはあるのです」というようなことを言って、これが犬笛ではないかという議論がされています。

この奇跡を起こす力というメッセージの中で、キリスト教原理主義者が読み取ることもできるメッセージとしては、奇跡という言葉で、例えばモーセの海割りのようなことを考えればいいかと思いますが、その言葉はそのようなことを直接的に連想させるキリスト教的なメッセージであり、またブッシュ自身がキリスト教的なメッセージを発する原理主義者の1人なのだというような2つのメッセージを、犬笛として読み取ることができるということが言われています。

ここで、私が政治的犬笛との比較で考えてみたいと思っているブラックジョーク的な犬笛なのですが、私はお笑いが好きで、劇場に行ったりもしますが、あるコメディアンネタが犬笛になっているのではないかという例を挙げたいと思います。

ある中堅どころのそれなりに有名なコメディアンが、お笑いの世界のある大御所と対立したことがあって、それで世間からバッシングされたというようなことが前提としてあります。それで、ある劇場でそのコメディアンが、ネタをするわけですが、前振りとして、個人的に色々なことがありましたというようなことをちょっとぼかして言うわけです。それで、このお話自体がお笑いに詳しい人だと犬笛として伝わるかと思いますが、おそらくこのコメディアンはあまりおおごとにしたくないため、具体的に犬笛だと分かりやすくなるような仕掛けをしていなくて、どちらかというとな犬笛だということをぼやかすような仕方で、コメディをやるわけです。コントとか漫才で、よくある設定ですが、勧善懲悪ドラマの真似をして、役柄Aがヒーロー役になって悪役を倒して、決めゼリフを言うというありがちなシーンをやりたいのですが、役柄Bが色々ボケて、悪役を倒して、決めゼリフを言うということをさせてくれないというよくあるコメディのパターンです。そのコメディアンにとってはよく知られたネタですが、そういうネタがあって、最後にオチとして、ようやくヒーロー役が悪役を退治して決めゼリフを言えるわけですが、その際の悪役がそのコメディアンと対立のあった相手を連想させるような役柄として、退治されるというようなネタがあって、それを見ていて、私自身はそれを犬笛メッセージとして受け取ったわけです。このコメディから読み取れる2つのメッセージとしては、最後の決めゼリフで前振りからのオチとして伏線回収を行ったというメッセージと、当該コメディアンというのはこの架空の世界の中で、相手にダメージを与えた、退治したというようなメッセージを伝えることができたのではないかと思います。

そのとき劇場にいた多くの人がこの犬笛に気づいていたかということ、そうではないように私は思われたのですが、そこで、この政治的な犬笛とブラックジョーク的な犬笛を比較した場合に、どういったことが見えてくるかというのを考えてみました。まず類似点としては政治的な犬笛としてのあからさまで意図的な犬笛とブラックジョークとしての犬笛のどちらもそこに2つ以上のメッセージというのを想定することができるのではないかということです。他方で、あからさまで意図的な犬笛としての政治的な犬笛とジョー

クとしての犬笛の相違点としては、政治的な犬笛とは違って、ブラックジョークとしての犬笛というのは、例えば投票行動などの派生的な行動というのを想定しにくく、隠れた意図的な犬笛のようなも想定しにくい。つまり、無意識に聞き手の情動の変化を引き起こすタイプのブラックジョークとしての犬笛というのは想定しにくいのではないかと。また、犬笛の二次的な拡散というのは、ブラックジョークとしての犬笛に関しては想定しにくいのではないかと。ということが言えるかと思います。

最後にまとめとして、今回、嘘、ミスリードとブラックジョークというのを比較して見えてきたことというのは、私の考え方としては、ブラックジョークを含むジョークの類というのがフェイクニュースに容易に変化するという、こういう状況において、ソールの定義というのは更新されるべき状況にあるのではないかと。というのが1つの点であり、政治的犬笛とは違って、ブラックジョークにおける犬笛というのは、無意識的な聞き手に対する作用とか人心操作のようなものが想定しにくいので、ブラックジョークとしての犬笛というのは、フェイクニュースのような、嘘・ミスリードとの対比で考えられうるブラックジョークと比べて、比較的無害と言えるのではないかと。ということです。

ただし、ブラックジョークとしての犬笛というのもローカルな形で、暗に個人ないし、集団の特性について言及することによって、ジョークを逸脱して、差別的意図を持った犬笛として使われるということは想定されるので、このような場合は気をつけなければいけないのではないかと。というのが、私の今回の発表の趣旨です。ご静聴ありがとうございました。

* * * * *

司会：山川さんどうもありがとうございました。

今日の課題の本は、読まれた方はおわかりだと思うのですが、すごく難しいです。少なくとも私にとってはとても難しく、理解がなかなかスッと入ってこないところが多いですけれども、山川さんの話はそこをブラックジョークという私たちにも分かりやすい例を引いて、導いてくださるような役割を果たしていただけたかなと思います。どうもありがとうございました。

そうしましたら三番目のご登壇者、沼田彩誉子さんにご登場いただきたいと思います。沼田さんの方からはさらに、私たち日本人としてこのソールの議論をどういう風に捉えて、そして展開できるかというお話をしていただけると聞いています。それでは、沼田さんよろしくお願いいたします。

沼田：よろしくお願いいたします。沼田彩誉子と申します。

本日、私は「犬笛、マジョリティの不安と不満、日本社会」と題してお話しします。大変読むのが難しかったこの本ですが、私は付録の犬笛に関する論文だけを扱います。注意点としまして、この論文は、トランプが勝利した2016年のアメリカ大統領選よりも前に書かれているということです。その後、ソールはいくつかの脚注を追加しています。その中で彼女は、「トランプのあとでは全く確信が持てない」と言っていることがあります。この点、報告の中で改めて取り上げます。小野純一先生が訳者解題で書かれているように、私たちが声を上げ続ける意義と効果をソールは示しています。本報告では、特に犬笛に関してどのような力をもらい、いかに日本社会の議論に活かせるかを考えていきましょう。

私は言語哲学とかアメリカ政治の専門家ではありません。普段は、カザン・タートルと呼ばれるテュルク系移民の経験に、オーラルヒストリーの立場から関心を寄せています。

そんな私がお話しできそうなのは、一読者として、ワシントン D.C. と東京での日々の生活の中で考えたことです。特に怒りや不安を抱いた経験とか、自分を省みたことを通じて、ソールの犬笛論を理解しようとし、さらにそこから「現実の解きほぐし」を目指してもがいた様子かなと思います。「現実を解きほぐす」という表現は、以前、読書会でも取り上げられた小手川正二郎先生の『現実を解きほぐすための哲学』からお借りしています。犬笛を理解しようとすると、見えてくるのは分断です。立場が異なっても、ともに考え、存在していくために、皆様のアイディア等、ぜひぜひお待ちしております。

これまで先生方のご発表で、定義をご説明いただいたのですが、ここで簡単におさらいすると、犬笛というのは 1980 年代にアメリカの政治ジャーナリズムで誕生した用語です。政治家またはそのアドバイザーによって、大衆の大部分に気づかれないように設計された故意の人心操作のことです。ソールは本稿でこの定義を改良していった、4 つに分けながら（おそらく中心的に述べているのは 3 つなのですが）説明しています。

本論文を読んで私が受け取ったソールのメッセージは、二点です。犬笛は密かに政治操作、人心操作を行うことができる、強力で有害な言語行為である。一つ目、だから気づかないまま、他者の犬笛を繰り返してしまうことに気をつけて。そして二つ目、だけど差別に気づき、指摘することで、犬笛と戦うこともできる。ここでは犬笛と戦えるという後者のメッセージを、先ほど 4 つの分類があると話しましたが、その中の 1 つである「隠れた意図的な犬笛」に着目しながら、捉えていきたいと思います。

隠れた意図的な犬笛の背景として、人種をめぐる規範をおさえる必要があります。1930 年代以前のアメリカでは、人種的不平等の規範が広く存在していました。人種差別的な態度、つまり露骨な蔑称の使用、「黒人は生まれつき遺伝的に白人より劣る」との主張、人種隔離などの法的な差別への支持表明が容認されていたということです。従って、政治家は単に人種差別的な見解を表明するだけで、人種差別主義の有権者の支持を獲得することができました。この人種的不平等の規範は 1930 年代から 60 年代に崩れ始め、60 年代以降のアメリカでは、今度は人種的平等の規範が普及します。これはあからさまな人種差別を容認しないということです。ただし、白人アメリカ人が、人種平等に口先だけでも同意しなければならないと感じる傾向があるという、極端に薄っぺらな形式だけの平等で、本質的な平等ではありません。とはいえ、許容される人種的な言説の範囲がわずかに変化したことは確かです。有権者が大事にしている平等主義への取り組みが疑問視されることになるため、明示的であからさまな人種差別は拒絶されます。従って、隠れた意図的な犬笛が、政治的な言説の中で特別な役割を果たすようになったのです。

規範に同意しない人種差別主義者を除いて、ほとんどの白人有権者は自分を人種差別主義者であるとは考えたくないし、あからさまな人種差別を支持しません。しかし、今も根強い人種的な不満という信念体系があります。それは、「黒人はもうそんなに差別されていないでしょう」とか、「黒人の生活が苦しいのは、彼らが怠け者だからでしょう」というような主張です。ある心理学者による人種的な不満の調査によれば、白人アメリカ人は人種に関して最も保守的で、共和党支持者は、その度合いが民主党支持者よりも著しく高いことがわかりました。以上のような社会的・政治的背景があるからこそ、隠れた意図的な犬笛が効果を発揮してしまうのです。

人種的不満に関連して個人的な経験として思い出したのが、ある英語講師との会話です。彼はイギリス出身の二十代後半の白人男性で、フィリピン人女性と結婚し、フィリピン在住とのことでした。この会話をしたのは 2021 年 3 月で、当時私はアメリカで暮らしていました。2021 年に入ってアジア系住民へのヘイ

トクライムが急増しており、その状況を話そうとしたのに対して「アメリカの人種に関する議論や社会に巻き込まれるのはまっぴらだ」と、最初から拒絶されてしまったんですね。それでカチンときて、いろんな話をしました。スライドに示したのは録音があるわけでもなく、私が記憶した限りの彼の発言で、あくまで沼田はこういう風に受け取ったんだという程度の理解をしていただければと思うんですけども、すでに言及をした一つ目の発言については、黒人差別の問題はイギリスにもあって何もアメリカだけのものではないので、「巻き込まれたくない、考えたくない」と言えること自体が特権です。そして二点目の「イギリスは先に発展しただけだ」については、例えば奴隷化された人々の存在ですとか、植民地主義の歴史を無視していると言えるでしょう。三点目の「僕たち（「僕」と報告者）は同じマイノリティだ」という発言に対しては、アジア系住民が実際に危害を加えられている国に暮らしている私の経験を、勝手に矮小化しないでくれ、と思ったんですね。なぜ話を聞こうともせず断言できると思うのかと、非常に憤った会話でした。

この会話の後に偶然、ソールが犬笛を解説する BBC の動画を見て、「まさに彼のような人に受けそうな」と思ったのを覚えています。つまり、特権的な立場にある人々にももちろん苦しみはあり、中には移民や非白人に鬱憤をぶつけたいけれどもあからさまに人種差別はできない、という状況があるとき、政治家という権力者がお墨付きを与えてくれる犬笛には、途方もない魅力があるのではないかと考えたのです。マジョリティの人種的不満は、人種の犬笛が効果を発揮する際の最大の栄養分であり、またホワイティ・フラジリティ、白人たちが人種問題に向き合えない「心の脆さ」¹と表裏一体ではないかと思います。なおソールは BBC で、イギリスにも犬笛政治があると例を挙げて説明しています。

この隠れた意図的な犬笛は、人々が意図的に認識できず、それでいて、聞き手の投票決定に影響を与えるほど非常に強力です。しかし、犬笛と闘うこともまた可能だとソールは言います。ただし、「戦うのは非常に難しい」。というのは、人種差別的だと異議を唱える人たちの言うことは、拒絶・否定・非難されるからです。散々な目に合うわけですね。しかし同時に、「勝つのは非常にたやすい」。先ほど述べた人種平等の規範が存在する場合、人種差別的だと異議が唱えられるとすぐに、犬笛の有効性は大幅に低下します。

こちらのスライドが、BBC の取材に答えるソール教授です。「何か人種差別的な要素が働いているのか気にすることです。多くの場合、それに気づきさえすれば、犬笛は前のように効かなくなります。」勇気が湧いてくる言葉ですよね。しかし残念ながら、人種平等の規範には限界があります。規範が機能しているかどうかは時と場合によりますし、成熟した社会に見えてもジェノサイドが起こり得ることは、歴史を通して私たちが見てきたことでもあります。

さらに論文を読んで「なるほど」と思いながらも、ぬぐえない疑問がありました。トランプは、新型コロナウイルスを「中国ウィルス」と呼びましたが、これはあからさまな人種差別ではないのか。トランプのやっていることは、犬笛ですらないのではないのか。ほとんどの有権者は、あからさまな人種差別を支持しなはずではなかったのだろうか。なぜ 2020 年になっても、半数近くが大統領選でトランプに投票したのか。結局のところ人種平等の規範は一体どこに行ったの？という疑問です。この点に関連する「イチジクの葉」について、後ほど是非小野純一先生にお話を伺いたいと思っています。

ソール自身、次のように指摘しています。「多くの白人のアメリカ人が自分たちを人種差別の犠牲者と考

¹ 貴堂嘉之「日本人はなぜレイシズム（人種差別主義）に向き合えないのか？—『ホワイティ・フラジリティ』の射程」『じんぶん堂』

<https://book.asahi.com/jinbun/article/14360121>

えるようになり、公然とそう主張するようになった。これは、人種平等の規範に違反することなく、人種的な不満を表現するもう一つの方法かもしれない。彼らは、自分たちは平等を支持しているが、黒人ではなく自分たちの待遇の方が悪いと主張するだろう。」報告の最初に、本稿はトランプ大統領誕生前に書かれていることをお伝えしましたが、その点に関しても、ソールは「私がこの論文を起草した当初、明示的な人種差別は失敗すると思っていたが、トランプの後では全く確信が持てない」と述べています。

なぜトランプの人種差別の言動を4年にわたって見聞きしたはずの人々が、2020年になってもトランプを支持したのか。The Conversation というメディアに掲載された「トランプによる白人の不安へのアピールは『犬笛』ではなく『人種差別』である」²という記事が、犬笛と人種平等の規範から、トランプのレトリックと彼の支持者を捉える内容でしたので、ご紹介したいと思います。

著者のベサニー・アルバートソンは、政治心理学者でテキサス大学オースティン校の准教授です。彼女は、「犬笛は、潜在的な支持者たちに特定の意味を伝える言語である。対象となるグループは文化的レファレンスを共有することで、コード化された政治家のメッセージを聞くことができる」と定義したうえで、ジャーナリストたちはトランプが新型コロナウイルスを「中国ウィルス」と呼んだことも犬笛だとするが、人種的な含意は隠されているのではなく、明らかである、犬笛と見なすのは間違っていると指摘します。そして Yahoo!ニュースによる 2020 年 5 月の世論調査³を紹介しています。「トランプは人種差別主義者であると思うか」という質問に対し、民主党支持層の 86%、無党派層の 56%が「はい」と答える中、共和党支持層はわずか 13%しか同意しなかったことが分かります。

アルバートソンは、トランプ支持者はトランプが彼らの恐怖心や恨みを煽っていることを無視しているわけでも、支持しているわけでもなく、気づいていないという重大な問題があると指摘しています。トランプ支持者によれば、「トランプはありのままを話すリーダー」なのです。彼女は、これは犬笛の理解を覆すものであると言います。トランプのレトリックに隠されたメッセージを拾っているのは、本来対象ではないグループであり、表向きの対象となるグループは彼の言葉を文字通りに受け取っていることになるのです。となると、トランプの支持者の大半は、本当に、トランプも自分たちも人種差別主義者ではないと思っている、あるいは気づいてはいるものの認めようとはしないと考えれば、人種平等の規範と理論上は矛盾しないことになるのではないかと私は思います。

報告の最後に、日本社会での議論に向けて思いついたことをお話しいたします。まず、規範が異なる日本社会で、人種差別が指摘されれば影響が弱まると、同じように期待することは可能なのでしょうか。アメリカを舞台に展開するソールの論文で描かれる「保守」と「リベラル」の性質が、日本のそれらと同じとも言えないでしょう。ソールの理論は日本社会の文脈ではどこまで援用可能なのか、という疑問がわいてきます。

切り口の一つとして、アメリカ社会の白人というマジョリティが持つ不安と不満の闇の深さは、他人事ではない、という点が指摘できるのではないのでしょうか。日本社会でも、例えば女性差別に対して声を上げ

² Albertson, Bethany, 2020, "Trump's appeals to white anxiety are not 'dog whistles' – they're racism", *The Conversation*.

<https://theconversation.com/trumps-appeals-to-white-anxiety-are-not-dog-whistles-theyre-racism-146070>

³ Yahoo! News Race and Justice - May 31, 2020.

https://docs.cdn.yougov.com/s23agrrx47/20200531_yahoo_race_and_justice_crosstabs.pdf

ると、「男性だって辛いんだ」という反応が起こります⁴。問題にしているのは構造的な権力であって、男性の辛さを否定しているのではないのだという理解が必要であるということ、「特権を持っている＝人生薔薇色でイージーモード、という意味ではない」⁵ことを確認しつつ、ソールが言及した「多くの白人のアメリカ人が自分たちの待遇の方が悪く、自分たちこそが人種差別の犠牲者だと主張するようになった」状況と通ずるものがある、と考えることもできるのではないのでしょうか。

日本社会で犬笛がどのように効果を発揮するか、誰に向かって効果を発揮しようかと考えると、マジョリティ性が高く、特権を持つと言われることに対して、「自分だって辛いんだ」という反応以上のことをできないでいる人々を無視できないと思います。したがって、差別や不平等をめぐる議論において、構造的な差別の実態に加えて、特権を取り巻く諸感情、つまり構造的に権力を持つ側の不安や不満も把握すると、犬笛論にも有効な知見を得られるのではないかと思います。

最後に、私たちが差別の犬笛の指摘を、勇気をもって実践したとして、「またポリコレ棒だ」、「言葉狩りだ」、「リベラルが何かやっているよ」といわれる可能性は大いにあるでしょう。あるいは自分が、「それは犬笛に誘導されているよ」と指摘された時にどう反応できるか。「ポリコレ棒」に関しては、そもそも表現を常に見直すという意味でポリティカル・コレクトネスは必要だと思いますし、「言葉狩りだ」と言える時点で自分の立ち位置を問う必要があるわけですが⁶、こうした「正しさ」に対する嫌悪感もまた、犬笛を日本社会の文脈で考えるうえで無視できないと考えます。

ソールは「人種の犬笛を指摘しても、人々は人種差別の態度を変えはしない」と言っていますし、異議申し立てが拒絶されることはソールの指摘そのもので、いわば折り込み済みでもあります。したがってこれ以上は、この読書会のテーマから離れてしまうかもしれません。それでも報告を準備する中で、例えば最近注目されつつあるインターセクショナリティなどの分析枠組みを足掛かりに、分断を癒す可能性はあるのだろうかと考えずにはいられず、報告の最後にこのように入れさせてもらいました⁷。

最後に、小野純一先生、山川先生に質問です。まず、アメリカ社会と日本社会の規範の違いに加え、英語の言語行為と日本語の言語行為の違い、例えば話し手責任と聞き手責任の違いなどは、犬笛にどのような影響を及ぼし得るのでしょうか。二点目の質問は、参加者の皆様を含めて投げかけたいと思います。どのようにして、ソールの理論を日本社会の議論に生かすことができるのでしょうか。

報告は以上です、ありがとうございました。

司会：沼田さん、非常にクリアかつ私たちの身近なこと、身近であるからこそ大事な問題を考える際に重要

⁴ 安田菜津紀, 2021, 「「こっちは辛いんだ」という言葉と「特権」」『日経 COMEMO』

<https://comemo.nikkei.com/n/nc2189ab52d75>

⁵ アルテイシア, 2021, 「「○○なんて関係ないよ」私もうっかりやらかしマンだった」『ウートピ』

<https://wotopi.jp/archives/120197>

⁶ ケイン樹里安, 2019, 「肌色と言葉狩り」, *note*

<https://note.com/julinote/n/ndea9b59c0d42>

⁷ たとえば、出口真紀子, 2021, 「特権に気づき社会を変えるマジョリティーへの教育を」『REPORT 働く人たちのための情報労連レポート』

<http://ictj-report.joho.or.jp/2106/sp01.html>

なご指摘の数々をありがとうございました。引き続き質疑応答をしながら議論に加わっていただきたいと思います。と思いますが、ひとまずご報告ありがとうございました。

では、まず皆様からのご質問まだチャットの方に寄せられていないのですけれども、今沼田さんの方から投げかけられた、お二人への質問ということで、小野純一さんの方からはご質問にお答えいただくのと、先ほどの積み残しになったイチジクの葉の議論の補足ということも併せてお答えをお願いしたいと思います、よろしくお願いいたします。

小野：言語別、例えば英語と日本語の違いに関して、それはもちろん文化的な背景によって差が出るのではないかと思います。ただこれに関しては具体例を持ち合わせていませんので、後で議論させてください。もう一つ責任の所在に関して、この後述べようと思っている「人種のイチジクの葉」とも関連してきて、おそらくプライベートな会話、つまりは聞き手と話し手との間で理解、どちらが何を理解させたのかという形でなら、責任の所在は問えると思います。政治的な発言というのは、おそらく不特定多数の人に問題が生じうるものなので、細かく見る必要がありますが、責任の捉え方が異なるのではないかと思います。これに関わる形で「人種のイチジクの葉」について言及いたします。

犬笛が、あからさまな差別発言をしない形を通して、差別を許容させる装置として働くように、「人種のイチジクの葉」も同じように差別を許容する装置として働くもう一つの危険な言語行為としてソールは取り上げます。確かにソールも、人種の規範が変化してきたということは認めていますが、犬笛もあ「人種のイチジクの葉」も「人種の規範」が機能しない状況下では行われない言語行為です。少なくとも合衆国では、規範がなくなったのではなく、変わってきたというのがソールの考えです。なぜならば、もし「人種の規範」がなければ、犬笛とか「人種のイチジクの葉」といった装置は不要であり、ということは、アメリカでは今でもある程度、規範が機能していると考えられる、というのがソールの見解です。

「イチジクの葉」は、例えばギリシャ彫刻や中世の絵画などで、性器を隠す機能があります。それが転じて、英語の元の意味としましても、転義的な意味でも、不都合なものを隠すということを意味します。これが政治的な文脈では、自分の人種差別的な考えを隠したいときに使われる表現という意味で用いられます。ここでもソールは字義の意味と「言われていること」の乖離から出発し、意味とは何かを考えるための新しい概念を構築しようとしています。そして同じく言語分析を通して、倫理的意義の大きな問題に取り組みます。

「人種のイチジクの葉」の一つに「共時的なイチジクの葉」があります。これは、差別内容を含む言葉と言う直前か同時に、「私は差別主義者ではありませんが」、あるいは「私にも黒人の友達がありますが」のように差別対象と実はうまくいっていますよという形でなされます。自分が言おうとしている差別をこれで隠蔽するわけです。

例えば、日本でも有名になった表現として、マリーヌ・ル＝ペンとドナルド・トランプの発言があります。トランプは、メキシコとアメリカの間の国境封鎖をしたいと言いたいときに、「メキシコは自分たちの最良の人たちをアメリカに送ってくるわけじゃない、レイプ犯を送ってくるんだ。でももちろん来る人の中には善良な人もいるでしょう」という言い方をしました。この最後の部分、「善良な人もいるんだけど犯罪者も来るんだ」という言い方で、自分は全員を排除していないと述べて、自分の差別的な態度を曖昧にし、実際に存在するであろう犯罪者のことを懸念しているんだと置き換え、自分の差別的な態度を隠蔽し、ただの懸念であるかの如く見せかけています。しかし実際には、差別自体がトランプの発言の趣旨でしょう。あるいは「レイプ犯がいる」が言いたいことでしょう。

こういった発言はどれも実は一般化された主張で曖昧です。社会集団に関する一般化された主張は社会的な偏見を煽り、しかも長引かせるという特徴を持つ、とソールは分析しています。そのような主張の際に、偏見を打ち消すために、人種差別的ではないと理解される余地を残しておくわけです。

他には「通時的なイチジクの葉」があり、これは事後的に行われるものです。先ほどの「善良な人もいます」というのは、同時に、つまり共時的に言われた発言ですが、それに似た表現として、アフリカ系アメリカ人とはすばらしい友人関係にありますよという発言があります。これも日本で有名になったトランプの発言です。それは「実際アフリカ系アメリカ人コミュニティには非常に厳しい内容だったと思いました」という発言から始まります。最高裁判事のスカリアという人が、アフリカ系アメリカ人をあまり成績の良くないテキサスの大学に入学させるのは、あまり成績の良くない学校に入学させるのと比べて利益にならないと主張する人たちがいる、という形で人種差別的な発言をしました。それに対してトランプは、通時的に後の時間にトランプはおおよそ次のような発言をしました。「アフリカ人コミュニティには厳しい内容だと思う。だから、判事の言ったことは好きではない。ただ、もう一度読ませてくれと思いました。実際に印刷されたものを見て、わたしは色々なものを読みますが、おおと思いましたよ」。

ソールはこれがイチジクの葉だと述べます。どういう点においてかという点、この発言には推論を阻止する機能があるからです。この「イチジクの葉」は、発言者が人種差別的な発言をしているのではないかという推定をストップさせてしまう機能がある。ソールはこの機能が、スカリアによる人種差別的発言の後に、トランプによってなされた発言の機能だと分析しました。ソールは発言そのものだけでなく、発話主体の意図を分析する形で、イチジクの葉の背後にある意図に注意することが重要だと、「人種のイチジクの葉」をめぐる議論をまとめています。

司会：ありがとうございました。そうしましたら、山川さんの方からも先ほどの沼田さんのご質問に応答をお願いいたします。

山川：はい、はっきりと明確に私の考えがあるという訳ではないのですが、先ほど沼田さんからお話のあった日本とアメリカといったような国別に、犬笛の発話に関する効果というんですかね、違いがあるかどうかということで、私が思う点を挙げるとするならば、先ほど私は特にブラックジョークとの関係で、あからさまで意図的な犬笛というのを特に取り上げたのですが、その場合、何らかの予備知識とか背景知識があれば、犬笛のメッセージというのは明確に認識できるものだと思うんです。

特に政治的な文脈で注目されるのが、隠れた意図的な犬笛というもので、あるいは意図的でない犬笛の場合、聞き手というか受け取り手が無意識に作用されて、犬笛が再拡散してしまうような場合がある。この場合は無意識ということで、ソールも言うように、犬笛のメッセージが意識化されれば、犬笛の発話者の意図をブロックできるということです。けれども、こう言った政治的文脈で犬笛が特に問題になる場合というのは、無意識に聞き手に作用してしまうということなので、そういった点を考えると、犬笛を吹く人間にとって、特に効果的に犬笛が機能している場合というのは、無意識の話ですから、おそらく無意識の領域に民族性などがあまり関係ないのだと仮定すると、そんなに国別の差はないのかなと思います。国別に犬笛の効果というのに違いがあるかというのは、恐らくそうではないのではないかなというのが私の想像するところです。ただ、国別によって、メッセージによって犬笛の効く度合い、こういったメッセージに特に反応しやすいとか、そういったケースというのは具体的に考えることができるのかもしれないですけども、

犬笛の効果自体というのは国別に差があると想定するのは難しいのではないかと私の想像するところではあります。

司会：山川さんありがとうございます。沼田さんの方から、お二人のお答えに対して何かございますか。

沼田：そうですね、まず「黒人の友人がいるから」という言い訳のようなものに関しては、本当にあるあるだなと思いました。「私はフィリピン人と結婚しているからレイシストではないんだ」と、それをそのままの表現で使った人もいますし。ですので私にとっては、その発言自体が人種差別だと思うのですが、そういう風に認識するかどうかはかなり個人差があるからこそ、犬笛が効果を発揮してしまうのかなと感じました。そして山川先生がおっしゃられた、無意識に影響されるという点においては、いわゆる民族性などが関係ないなら、影響の差はないのではという点に関して、ああそうだな、無意識に受けてしまうことについては、確かにそこに差を見出すということではないのかもしれない、と思いました。ただ、そこでどうしても気になるのは、無意識であるにしても、その文化的レファレンスを共有するグループ、ターゲットとされるグループがいて、他方でそれが聞こえないだろうと言われる対象外のグループがいる、ということを考えると、誰が影響されやすいのかという意味では、国別、言語別の違いというのも具体的に見ていく必要がやはりあるのではないかと感じました。

司会：はい、ありがとうございます。そうしましたらフロアーの皆さんからも、何かご質問あるいはご発言になりたい方いらっしゃいましたら、合図をお願いいたします。

今チャットの方に質問が入りましたので、読ませていただきます。

三人の先生からそれぞれの工夫や例示を通して共有してくださったことを感謝します。今回のお三方の話は、政治的なマクロな文脈におけるものですが、おそらく私たちはミクロな文脈でもこのような体験をしていると思いました。例えば、インタビューの折に表れる、犬笛的なほのめかし、言いたくないこと、その社会では恥ずかしいと価値づけられるような事柄をミスリードするなどです。私は心理療法で個人の成育歴が語られるような場を想定します。犬笛・ブラックジョーク・ほのめかし・ミスリードなどたくさんありますよね。小野先生が最初に指摘された神秘主義者の体験をどう理解するかという問題、神秘主義者がその体験の中で私は神だと語るることにより、暴力の標的になるような事柄を細かく分析するツールをいただいたように思いました。

ということで、特にご質問ということではないですけども、お二方いかがでしょうか。小野さん何かありますか。

小野：日常レベルですと、これを犬笛か「イチジクの葉」と言うべきかどうかはわかりませんが、子供がよく言う言い方としては、「だってみんな持ってるもん」という形で、自分が欲しいと言わずに他の人が持っているという事実を言っているのは、自分の意図を隠して、でも成功させようとしている点が「イチジクの葉」だと思うんですが、どうでしょうか。

日常レベルでも、嘘もミスリードももちろんあるわけですし、犬笛も「イチジクの葉」もありうると思うんですけども、おそらくソールの意図としては、やはり社会的な影響の大きさが念頭にあると思います。

社会的な意義ゆえにフェミニズムや人種差別といった問題に取り組んでいると思います。それは規範を変えてしまうような言語行為という点で社会的影響力が甚大だからです。この点で沼田先生の疑問点とまたリンクしていくと考えます。

司会：ありがとうございます。山川さん、今のご指摘についていかがですか。

山川：ちょっと今の質問に直接的に関係があるかわからないんですけども、日常的な発話ということで、イチジクの葉に関してお話しします。

イチジクの葉、つまりこちらの意図を隠してしまうのがイチジクの葉だと思うんです。具体例でお話すると、少し前に小野純一さんが別の同じような研究会でご発表されたのを聞いていて、話の文脈で「皆さん哲学を勉強すべきじゃないですかね」つまり「差別とかなくすうえで哲学を勉強したらどうでしょうか」というような話をされて、それに対する反発のような声があったんですね。小野純一さんは「それは私のジョークです」とおっしゃった、ということがあったのですけれども、それってどうなのでしょうかね。

「それって私なりのジョークです」というのは、ある種イチジクの葉のように思われる瞬間があったんですけれども。でも本音かもしれないし、イチジクの葉のようにみえる発話で、「本当はやはり自分は差別主義者ではないんですけれどね」と言われたときに、本当に差別主義者ではないんだよというように理解できる場合もあるのではないかなと思ったので、そのあたりのこと、逆に私の疑問としてちょっと、聞いてみたいのですけれども。「何人の友達がいるんですけれども」と言われる場合、本当にその人は、自分は差別主義者ではないと思っているというケースはあり得ないんですかね。

小野：先ほど沼田先生がおっしゃったように、本人は気づいていないけれども、社会に共有されている規範からすると、それはやはり差別と言わざるを得ず、やはり人種差別の規範がどういう形でその社会にあるかが重要になるんじゃないかと思うんです。

例えば僕の冗談であれば、半分冗談、半分本心で言ったわけですがけれども、個人レベルでは、やはり意図が重要になってくると思うんですね。子供が欲しいという自分の欲望を隠してみんなが持っているという状況を記述するというのは、やはり個人の意図だと思います。けれどもソールがそれを超えて着目するのは、社会的な影響とか効果がある発言です。なぜそれが重要かというと、それは規範を変えてしまう言語行為だからです。それは沼田先生が指摘しているような規範がなくなったのではないか、変容したのではないかという問題につながっていくと思います。だから個人と社会、プライベートな言語行為とパブリックな言語行為という明確に分けられるなら、プライベートの方は意図を中心に見る方が適切な場合が多く、パブリックな言語行為に関しては、その社会的な影響とか効果の方で判断すべき問題と言えそうに思います。

山川：ということは、今回のご質問の話で言うと、プライベートな場面ですよ。ということで言うと、なかなか難しくないですかね。パブリックな場合は規範と照らし合わせればいいんですけども、プライベートな発話の場合は、なかなかこれはイチジクの葉だとかって断定しにくいということはないんでしょうかね。

小野：でも、やはり意図を隠そうとしていれば、隠す意図という点でやはりプライベートな領域でのイチジクの葉ということになるのではないですかね。

司会：ありがとうございます。他にフロアーの皆さんからも、もちろん今の件でもそれ以外のことについてもいかがでしょうか。Aさん、今の話に関して何かありますか。

A氏：初めまして、お三方がすごく具体的な話をしてくださって、今日はいろんな刺激をされまして、実は今の質問はわたくしが司会の小野さんに送ってしまっていて、それを匿名で読んでくださったんですけれども、引き出されちゃいました。

小野純一先生がおっしゃったソールの意図は、個人レベルを超えて、政治的な社会的な効果にフォーカスを当てているというのは本当にその通りだなと思って、改めてこの本の意義を感じさせてもらったんですけれども。同時に私は傾聴者の養成というのをやっていて、カウンセリングみたいな場を作る人をトレーニングしているんですけれども、その場で傾聴している相手にコントロールされるような場が起こることがしょっちゅうあります。

その話を聞いていて、相手が犬笛的なことをインタビューの語りに盛り込んできたり、あるいはそのイチジクの葉的なことを盛り込んできたりして、一対一の関係なんですけれども、非常に相手の中に取り込まれてしまうようなことがあって、それと似たような、ある意味ちょっと大局的な状況でコミュニケーションがうまく整理されない状況を沼田先生が語ってくださった気がするんですけれども、一対一の場でも結構、犬笛的なもの、ブラックジョーク的なもの、イチジクの葉的なもの、それこそミスリードというのが巧みに使い分けられて、我々がコントロールされてしまっていることに気づけないようなことがすごくあるなあということを、今日はすごく刺激をいただいたという感じで。一対一の場面でもそういうことがあるということを感じて、ワクワクしております。お礼みたいなコメントです、ありがとうございます。

司会：ありがとうございました。チャットの方に質問が寄せられていますので、読ませていただきます。

まだ本を読んでいないのですが、興味深い内容でした。この巣ごもり読書会というのは本を読んでいない人でも参加して楽しめるという点があるので。無意識的なあいまいな偏見を理解するうえでは、マイクロアグレッションでの分類との兼ね合いを考えると、イチジクの葉や犬笛との分類や定義含め面白そうだなと思いました。潜在的肥満偏見をテーマにしようと考えているのですが、日本において太っていることは悪いこと、太っている人は怠けているという偏見は社会的偏見として許容されていると思いますか。また他者の体型について言及することについては、現在規範意識がどの程度あると思いますか。これどなたかお答えの準備、もしくはご意見ありますか。

沼田：では、よろしいですか。このマイクロアグレッションに関しては私もずっと関心を寄せていて、まさに犬笛の理解をするうえでいつも頭の中にあったことでした。太っていることが悪いこと、怠けているという偏見は、最近は少し変わってきた気がします。

お笑い芸人の渡辺直美さんっていらっしゃいますよね。彼女がボディ・ポジティブのシンボルのようになっていて、オリンピック開会式で彼女にひどい格好をさせて出すというような提案があったことに対し

でも、しっかりと批判の声が上がるということは、少し規範が変わってきていることの現れかなとは思っています。

とは言え、つい先日、「ルッキズム」に関する講演会に参加したんですけれども、そこでゲストスピーカーを務められた先生が、渡辺直美さんが脱毛の広告に出ていることに言及しながら、次のようなお話をされていました。いかにボディ・ポジティブの感覚が生まれようとも、さらにそこで許されるべき身体と許されない身体、例えば脱毛＝毛深いということが否定されているわけですので、そこはずっと注意して見ていかなければいけない、と。

したがって、他者の体型に言及することについて、今のところはひどい差別的な状況がまだまだあると思うんですけれども、変化の兆しは見えている。ただそこで、今度は新たに別の排除を生み出さないかということに自覚的である必要があるのかなというのが、私が個人的に学ぶ中で感じていることです。

山川：ちょっと今の件に関連して少しよろしいですか。

司会：お願いします。

山川：お笑いに関する発表をしたということもあって、少し日ごろから疑問に思っていることを、お話しできればと思うんですけれども。お笑いにおいては容姿に関して自虐的な言及というのはよくありますよね。そういう問題について、どうすべきなのか。それはいけないという方向になってゆくのかもしれないですけれども、表現の自由という問題もありますし、そのあたりの問題について私いつもどうもしっくりこないというか、どう考えていいのかちょっとよくわからないところがあるので、今後自分なりの課題にしてゆきたいと思うんですけれども。他者の容姿に言及するのではなくて、自分自身の容姿について自虐的に言及することによって、やはり受け手としてそれによって心理的なダメージを受ける人というのも想定できるので、そのあたりはどう考えればよいのかというのはちょっと難しい問題だなと思っております。

沼田：そうですね、よくそこで表現の自由という言葉が出てくるのですけれども、表現の自由というのは他者を痛めつけることを言ってもいいという訳では、もちろんないですよね。そのことを考えると、自虐であれ、同じ特徴を持つ人が徹底的に傷つくのであれば、それはもはや、してはいけない表現なのかなと私は捉えています。

特に、これだけ見た目に対して自由にひどいことが言えてしまう状況、ジャッジされる側とする側に圧倒的な、例えばジェンダーの差が見られる場合、そこは表現の自由というよりはもっと構造的な力関係に着目してみると、もしかしたらそんなに難しいことではないのかもしれません。人が傷つく表現が今まで認められてきたことを顧みる時なんじゃないかという風に、よくジャッジされる側に立つことが多い属性を持つ者としては感じるんですが、いかがですか。

山川：そうですね。私自身もそう思うんですけれども。それをどう、つまり発言者の自主性に期待するのか、発言者の外部からある種法的に規制する方向にもっていくのか、どれが最適の形なのかという問題もありますし、あまりに規制、規制となってしまうと非常に窮屈な社会になってしまいますから、そのあたりがこう難しいと言いますか、どうすればいいのかというのはわからないという点があるんですね。

沼田：規制ということを考える時、少し飛躍してしまいましたが、やっぱりヘイトスピーチというのはヘイトクライム、犯罪であって、これはきちんと整備しなければならない。それとは少し別に、考えた方がいいと思うのは、規制、規制で苦しくなるという、その苦しくなるのは誰か、規制によってむしろ守られる人は誰か、という、その立場性みたいなものです。誰が苦しくなるって言っているのでしょうか。「規制、規制って困るよね」って言っているのは誰なのかなって思うんです。そこにどうしても、今までの圧倒的な構造的差別があって、その上にそのような発言があるような気がするんです。個人だけに願うよりも、ヘイトスピーチに関してはちゃんと法整備してゆくべきだと思いますし、と同時に、もちろん規制だけがいいと私が思っているわけではありません。むしろ今は、何か発言が抑えられ過ぎている、批判精神をもっと出していくことが大事なんじゃないかと思う局面も、たくさんあります。となると、規制の前に、やっぱり規範、いくら差別的な考えを持っている人であれ、あからさまに表現をしない方がいいという風にアメリカが変わってきたというのは、まさに規範の領域ですので、その方向に進むことがまず大切です。そのためにこういった研究会があったり、社会運動があるんだろうなと、今お話を聞いていて思いました。

司会：はい、ありがとうございました。挙手をされている方がいるのでよろしいですか。Bさん、よろしくお願いします。

B氏：どうもありがとうございました。色々門を開かれる感じがありがたく思います。ちょっと話がずれるかもしれないことをお許しいただきたいのですが、こういった犬笛的な議論は意図して使われる、政治家なんかは意図して使っていることだと思うんですが、いわゆるディベートとか、レトリックのような形で実は長い伝統の中でこういうものが、いわば習得されるべき一つの技術として、政治家にアドバイスする人間等がそれを教授しているのではないかということのをちょっと考えるわけです。この本を読んでいないのでわからないのですが、皆さんある意味、前提としてもうすでにそういうことが共有されているかもしれないのですが、伝統的な修辞学との関係でこういう議論の使い方というのは、どのように位置づけられているのか、もし教えていただければと思ひまして、よろしくお願いいたします。

司会：はい、ありがとうございます。どうでしょうか。小野さんか山川さん、いかがですか。

小野：犬笛論文では、犬笛がどのように洗練されてきたかという観点から歴史的に書かれています。例えば、共和党がそれを積極的に政治戦略として用いてきたことなどです。特にどの人がどのようにどういった洗練化を行ったかということが、ごく簡単ですけれども言及されています。その一連の流れで、アメリカのそういった政治戦略家が日本に招待されて、選挙運動の時のアドバイザーになったりしているということが日本の報道機関で報道されたことがあります。具体的にどの媒体にいつ報道があったかはちょっとすぐに思い出せませんが、少なくともアメリカの戦略家に関してはいくつか上がっておりました。

B氏：ありがとうございました。

司会：ありがとうございます。チャットの方で、先ほどの方の関連かな、自虐する権利というのはある程度認められるべきかなと思ひました、自虐に対する意見を表明する権利も認められるべきかなとも思ひます、

というご意見いただきました。ご発言いただけますか、もしよろしければ。

C氏：書いた通りなんですけれども、内容にもよったり、影響を受ける人の範囲にもよるのかなと思うのですけれども、個人的に自分のことに関してはボヤキというか自虐的なことを言うのは基本的には認められた方がいいんじゃないかなと。それに対して影響を受けて、例えば「いやだな」と思ったら、それに対して反対意見を述べるというのは、別にそんなに問題ないのではないのかなと思って。そんなに抗争とかに発展するでなければ、良いんじゃないかということを思いました。

司会：ありがとうございます。

沼田：もうこの議論は、これだけで研究会を開けるくらいの課題じゃないかなと思います。

* * * * *

司会：はい、ありがとうございます。そうしましたら、話が尽きないところではありますけれども、時間ももうすでに超過してしまっています。最後に、この研究会の代表者である長澤先生がお入りいただいているので、先生よろしいでしょうか。

長澤：三人の先生方ありがとうございました。質問してくださった方もありがとうございました。

先ほど沼田さんのご質問のところで、英語と日本語というところで、確かエジプトのアラビア語に曖昧な表現があるというところがあって、そこがちょっと私は面白いなと思いました。やっぱり言語の問題ってあると思いますし、やっぱり大きいのではないかと思います。犬笛も、日本的な犬笛みたいなものってもちがう、日本の場合、非言語的な、非発話的なものを含めて何かあるような気がしますし、いわゆる沈黙の暴力みたいなものも含めて、やっぱりいじめの問題も最近またいろいろな事件が起きていますけれども、そういう問題も日本語的な問題も含めてなにかあり、専門家の方に検討していただけたらばいいなと思います。沼田さんの方から、まさにイスラーム・ジェンダー的な観点から、インターセクショナルリティの問題を含めてコメントしていただきまして。いろいろな関心の方が参加されて、是非皆さんも本をお買いになるなり、お借りになるなり、読んでみたら良いんじゃないかなと思いました。特に最後、犬笛的なところから入るというのも読み方として面白いと思いました。

また、日本的な文脈で展開するところが、応用的なことができればいいんじゃないかなと思いました。我々のイスラーム・ジェンダー学研究としても、一つの手がかりになるような論点を提供してくださるような研究とその翻訳だったのではないかと思います。ありがとうございました。

司会：長澤先生ありがとうございました。それでは今まとめていただきましたけれども、今回イスラーム・ジェンダー学科研の主催で、この読書会を開催させていただきましたけれども、今まであまりかかわりのなかった先生方にも多く参加していただくことができまして、イスラーム・ジェンダー学科研のネットワークづくり、ネットワークの拡大という目標にも、寄与できたんじゃないかなと思っています。

長い時間になりましたけれども皆様ご参加いただきましてありがとうございます。

ご登壇者の小野純一さん、山川仁さん、沼田彩誉子さん、改めましてどうもありがとうございました。